

フィールドワーク 心得帖

第23回 塩田光喜

第二の眼が開く時

今の若い人類学者は知らないが、私（一九五六年生）の若い頃、人類学者の卵達は、見知らぬ未開の地に残る、近代文明が失ってしまった奥深い秘密の知恵を見出し、学び、招来せんものと、アマゾン、ニューギニア、アフリカの秘境へと旅立って行ったものだ。あたかもユルスナールの傑作『黒の過程』の主人公ゼノンやゲーテのファウストのように。

そこには多分にロマンティシズムの要素があったが、それと同量のリアリティも存在した。少なくとも、私にはあまり「調査」という意識はなかった。

私の赴いたニューギニア高地のインボン族は一九五三〜五年に初めて白人の統治下に入った民族で、一九八五〜八七年の私のフィールドワークの時点では、石器時代に生まれ育った戦士達が数多く生存していた。

私の目的はこうした老人達から石器時代の知を学ぶことだった。

そのためには、まずインボン

グ語を習得せねばならなかった。これは至難の業だった。当時、人口が三万人ほどだったインボン族には辞書も文法書もなかったからだ。

そこでまず、パパアニューギニア全体に流通していて、若者達ならしゃべれるピジン・イングリッシュに取り付いた。

これは一カ月ほどで習得できた。

問題はインボン語だった。母語としてインボン語を覚えたと若者達は自分達の言語を系統立って説明することはできなかった。

役に立ったのは、大学時代に受けた言語学の講義だった。名詞を言ってもらって、口唇の開閉や、口蓋にどう舌を当てるか観察して、音韻体系をまず見つけ出し、自分なりに記号化する。私の場合はカタカナにいくつかの記号を加えてつくった。そして、片っ端から名詞を集めていく。たとえば、「コンブ・カンディエ（繊細な場所）」は「星」といった具合である。

次は動詞の活用である。ここ

が肝である。ピジンで文を作り、インボンに直してもらおう。人称、過去、近過去、現在、未来条件法、命令形、願望形などに応じて、動詞が屈折するパターンを覚えないと、インボン語は話せないからだ。

苦労するが、これも何とかクリアした。

次に、老人達に短いストーリーをゆくりしゃべってもらい、それを自分の音韻記号でノートに書いてゆく。そして、若い衆にピジンに直してもらおう。だが、ピジンは大雑把な言語だから、微妙なニュアンスはわからない。そういう時は、そうした表現を貯めておいて、バスでとことこ町まで出て行き、そこから首都のポートモレスビーまで飛んで、私をインボンの地に招いてくれたサイモン・アペを質問責めにする。

サイモンは大学の心理学課程に在学中で、ゆくゆくは政治家になり、未は総理大臣にと胸に期していた。

私はこれまでの人生で、サイモンほどの明晰な頭脳の持ち主

に会ったことがない。サイモンの父アペ老人は白人統治官の片腕としてインボン中をパトリック・ミッシェンのそばに育った。祖母の里はカトリック・ミッシェンのそばにあつたので、サイモンは幼少時からミッシェンに出入りしていた。宣教師達は聡明なサイモンを愛し、英語を教えていった。サイモンは宣教師達の期待に応え、抜群の知性を示した。サイモンの読んだ『聖書』は欽定訳（キング・ジェイムズ・バージョン）といって、一七世紀に英訳された格調高いものだった。You（お前）ではなく、Thou（汝）、Your（お前の）ではなく、Thy（汝の）を使う文語訳で、今では英語国民でも読み切れない程のものだ。そして、サイモンは小学校を卒業するまでにミッシェンの図書室にあつた英語の本を全て読破していた。

サイモンは私にインボン語の特異な表現を英語で明解に説明してくれた。

「コンブ・ウエンゲンデルム

は神話の時だけに出てくる表現で、世界が誕生した時を表すものだ。ヌ・ウエンゲンデルムと言つと、自分だけがこの世にいるといった風の威張った態度をとる男に、「お前は神に特別に創造された」という意味の当てこすりになる。」という具合である。

サイモンの説明は驚きの連続であるとともに、目からウロコの連続だった。

目からウロコが落ちる度に、眼前に新しい世界が開けてゆくのだ！

インボング語には、日本語にも英語にもない、独特の世界像が内蔵されていた。

「トロ」は「打つ、叩く」という意味の動詞だが、これが人間の、世界に対する働きかけの基本を成す。たとえば、鉛筆で紙に字を「書く」という行為もインボング族の目には「トロ」と写る。「瞬間的に大きな力を加える」行為は全て「トロ」なのだ。それは家の柱にするために木を倒したり、料理や暖を取るために薪を割ったりするために、石斧を振るうことと本質的に同じ行為なのである。

こうして、インボング語の世界像を身に付けると、私は家を

建てたアンブル村から、ラジカセを担いで、石器時代の戦士達の物語をしてくれるという老人達を求めて、アシスタント役のキンジャロやテレマとともに村々を訪ねて歩いた。

私のフィールドワークは常にアシスタント連れである。まだ言葉は完璧ではなかったし、地理もよくわからないこともあったが、私は昔から、ドン・キホーテやドン・ジョヴァンニやファウストのように、従者を連れて世界を放浪・遍歴するという物語りが大好きだったからだ。

石器時代の老人達は私を実によく可愛がってくれた。自分の息子達や孫達は新しくやって来た近代文明の時代に飛び込むとはやっていて、父祖の時代の話なぞまるつきり興味がなかったからだ。そこへ、自分の話を一生懸命聞いてくれる、顔形も違えば皮膚の色も違う若い異邦人がやって来たのだ。当時、私は中学生だと思われていた（日本人は一樣に若く見られる）。

私もまた、石器時代の老人達を敬愛していた。彼等は戦いの日々をくぐり抜け、修羅場をくぐった人間のみが持ち得る父性愛と威厳を備えていた。そして、初めて白人文明と遭遇したこと

で起こる事件は一つ一つがまるで伽（か）話のようにファンタスティックだった。

そして、一九八六年、私自身が、インボングの地に突如起こったキリスト教終末運動に巻きこまれることになる。

奇蹟が起き、聖霊が降臨し、天使やイエス・キリストが現れ、人々は夜に日を継いで教会に集い、聖歌を歌い、お祈りをし、悔い改めの告解を行った。私も、半年の間、毎日、悔い改めてキリスト教徒になれという愛の折伏（せきふく）を受け続けた。ついには、失語症になってしまったほどだ。

そして、終末の熱狂が退けると、祭りのシーズンがやってきた。我がクランが行うブタ屠りの儀では、よその村から牛を連れてくる役目も果たした。

ああ、何という二年間だった



我が人生の師モゴイ・オガイエ

たろう！ 人類学者にとって、フィールドワークはイニシエーションだとよく言われるが、私の場合、文字通り、それはイニシエーションだった。肉体的にも精神的にもきつい試練の二年間だったが、同時に、胸躍る高揚の二年間でもあった。

そして、その試練の二年間をくぐることによって、私は「塩田文明史観」とも呼ぶべき世界史のパスペクティヴを獲得したのだった。

フィールドワークは、私の額に、シヴァ神のように「第三の眼」を開けてくれたのである。

《参照文献》

●塩田光喜「二〇〇六」『石斧と十字架―パプアニューギニア・インボング年代記』（彩流社）。



治療儀礼を行うアベ・コデューロ